私を育てた
あの時代、あの出会い
第13回

人と出会い、本物に学ぶことが教材づくりの軸をつくってくれた

長野県 岡谷市立神明小学校校長 **宮坂昌一** MIYASAKA SHOICHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、宮坂校長が語る。

みやさか・しょういち　専門教科は社会科。軽井沢町立軽井沢東部小学校、諏訪市立高島小学校、長野県教育委員会松本（現・中信）教育事務所指導主事、諏訪市立城南小学校教頭などを経て、現職。

- 1978（昭和53）
  新採として
  小海町立北牧小学校
  （現小海小学校）
  に赴任
- 1985（昭和60）
  富士見町立
  富士見高原中学校
  （現富士見中学校）
  に赴任
- 1988（昭和63）
  信州大教育学部
  附属長野小学校に赴任。
  先輩の先生方に
  鍛えられる

クラスで農家を訪れ
きゅうりの栽培の
様子を見学。
子どもたちは
きゅうりの収穫も
体験した

- 1991（平成3）
  諏訪市立四賀小学校
  に赴任。道徳教育の
  研究を進める
- 1994（平成6）
  長野県教育委員会
  長野（現・北信）
  教育事務所指導主事
  に着任
- 2003（平成15）
  下諏訪町立
  下諏訪南小学校に
  教頭として赴任
- 2008（平成20）
  飯田市立竜丘小学校
  に校長として赴任
- 2010（平成22）
  岡谷市立神明小学校
  に赴任

人々の営みにふれ、自分のあり方を問う授業を

私は中学時代の恩師、伊藤岩廣先生の導きで、社会科の授業で地元の工場をいくつも見学しました。カメラ、バルブ、寒天などの工場で働く人の話を聞いて、仕事には目に見えないところでこんなに苦労があるのだと深く考えさせられたことを、今でも覚えています。こうした経験もあり、教師となった私は、子どもが人と出会い、本物にふれ、自ら体験することにこそ学びがあると考え、教材研究をし、指導をしてきました。

自分の教師としてのその軸を追究できたのが、信州大教育学部附属長野小学校での3年間でした。社会科の研究会で主任の黒岩修治先生がよく言われたのは、「人々の営みにふれ、子どもが自分のあり方を問うような授業にしよう」です。それは、私の中学時代の工場見学での経験と重なりました。本物だからこそ感動し、真剣に取り組む人が話すからこそ心を動かされ、そして、自分はどうなのか、どうありたいのかを考えるようになる。それが、私の目指す授業となりました。

しかし、本物にふれる活動を取り

入れながら、社会科の目標を達成するような授業を行うのは、私にとって高いハードルでした。他の先生の授業を見る機会がよくあったのですが、他学級の子どもは自分で考え、話し合いを進め、自ら学んでいました。同じ学年のはずなのに自分の学級とのあまりの違いに驚き、子どもたちをそのように導けない自分が情けなくてしかたありませんでした。子どもの内面をも十分に見取った上での活動でなければ、学びには結び付かないのだと痛感しました。

また、ある研究会で、完成間近の紀要を「この授業で何をやりたいのか分からない」と言われ、一から作り直しをさせられました。「子どもは楽しく活動できるかもしれないが、活動が単に流れているだけで、それぞれの場面で子どもにどういう力を付けたいのかが弱い」との指摘でした。自分としてはその要素を入れているつもりでしたが、まだまだ浅いことを痛感しました。

「本物だからこそ感動し自分のあり方を考えられる」

研究授業で大失敗もしました。子どもからたくさん発言が出てきたのはよかったのですが、思いもよらぬ方に話が進み、子どもの発言をつなぐことも質問に答えることも出来なかったのです。明らかに準備不足でした。そんな私を見透かしてか、授業終了後、ある子どもが「今日はしまりのない授業だったね」とつぶやいたのです。私は冷や汗をかきましたが、事後研究会で「普段は満足できる授業をしているから、子どもはああ言ったのだろう」と先生方に言われ、救われた思いがしました。

教材は自分の足で探し、人との出会いでつくる

この時のもがき苦しんだ経験から学んだものも大きく、その後、一から出直す気持ちで教材研究に没頭しました。インターネットなどない時代でしたから、頼りにしたのは自分の足。休日に車を走らせ、気になるものを見付けては車を止めて調べたり、人に話を聞いたりしました。

ある時は畑で作業中の人に声を掛け、その農業に対する真摯（しんし）な姿勢に感銘を受けて、後日連絡し、子どもと農作業を見学させてもらったこともあります。人が違えば、話す内容も違います。子どもにどんな話を聞かせたいか、そこから何を感じ取ってほしいか。本物であると同時に、どんな人が子どもに語り掛けるかも重要だからです。

教材づくりの姿勢は、校長になった今も変わりません。中庭にある遊具や渡り廊下のすのこは、昨年、6年生が地域の大工さんに指導を受けながら、学校の裏山にあった間伐材を活用して作ったものです。高学年として人の役に立つ活動をしたいという子どもの思いを聞き、私がかねてから目をつけていた間伐材を使って何か作るのはどうか、場所は空いている中庭を活用できないか、地域で木を大切にする大工さんを探せないかと、先生方の教材づくりを支援しました。

子どもを指導するのは教師です。しかし、授業は子どもの思いから発するもので、子どもと教師が共につくるものです。休み時間などに先生や子どもと話し、何をしたいのか、どんな思いがあるのかを聞いています。授業は持たなくても、一緒に授業をつくる気持ちで教材づくりをすることが、私の楽しみでもあるのです。